

令和5年度 研究紀要 (web版)

## つながる保育 (1年次)

～ 園と園のつながりをつくる～



上越教育大学附属幼稚園

## もくじ

1 - 1	研究概要
1 - 2	アウトカムプロセス
1 - 3	研修ヒストリー
2 - 1	3歳Ⅰ期エピソード
2 - 2	3歳Ⅱ期エピソード
2 - 3	3歳Ⅲ期エピソード
2 - 4	3歳Ⅳ期エピソード
2 - 5	4歳Ⅴ期エピソード
2 - 6	4歳Ⅵ期エピソード
2 - 7	4歳Ⅶ期エピソード
2 - 8	4歳Ⅷ期エピソード
2 - 9	5歳Ⅸ期エピソード
2 - 10	5歳Ⅹ期エピソード
2 - 11	5歳Ⅺ期エピソード
2 - 12	5歳Ⅻ期エピソード
3	今年度の研究を振り返って

## 1 研究主題

つながる保育（1年次） ～ 園と園のつながりをつくる ～

## 2 研究主題「つながる保育」について

子どもたちが今生きている社会は、AIなどの先端技術の導入、新型コロナウイルスによる「ニューノーマル」と称されるような新たな生活様式により、変化がはやく先の見通せない社会である。幼児教育においては、このような様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となるようにするための基礎を培うことが求められる。

中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」（2022）では、2020年代を通じて実現すべき教育の姿として、多様な子どもたちを誰一人残すことなく育成し、多様な個性を最大限生かすため、「個別最適な学び」と「協同的な学び」の一体的な学びの充実による質の高い学びの実現に向けた取組を進めていくことを提言している。幼児教育段階においては、遊びを通して総合的に幼児の育ちを支えること、幼稚園・保育園・認定こども園といった施設類型や、地域や家庭の環境に関わらず、全ての子どもに格差なく質の高い学びを保証することが重要である。一方で、「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」（2022）では学校種や施設類型を超えた相互理解、連携・協働や、幼児教育の質に関する社会的な認識の共有がされているとは言い難い現状を指摘している。小学校入学時点ですでに学びの格差が生じていること、幼児教育がいわゆる小学校の前倒しのような早期教育と捉えられていることから、幼児教育の質のさらなる向上と、その認識の共有が欠かせないと考える。

本園の前年度までの研究「子どもを支える保育—評価を通して—」では、評価の4つの取組に基づき、暗黙知とされてきたことを言語化することを通して、保育の質の向上や認識の共有につながったという手応えを得た。一方で、秋田喜代美（2023）は、「幼保小の架け橋プログラムの始まりにおいても、地域において私立や民営の幼稚園や保育所、子ども園をつなぐ役割が国公立の園には求められています。（中略）これからは、同僚や園だけではなく、多様な子どもから、異なる施設や校種からも心を開き学べることが求められます。その中で日本の幼児教育のよさを発信し、園や保育者の独自性と卓越性を活かした協働が一層求められるでしょう」と述べている。今後求められる保育の質の向上は、保育観を共有している職員との語り合いや保育の評価にとどまらず、違う文化的な背景や価値観にふれることで、保育に対する見方・考え方を更新していくことが必要であると捉えられる。文化的な背景や価値観を交流することでその変容を自覚し、交流することの意義を実感することができれば、相互に保育の質を高め合う関係を構築していけると考える。このような双方向の関係性の構築が、秋田（2023）における「つなぐ」ということであり、地域において国公立の園が担うべき役割でもある。

そこで、子どもの豊かな育ちを支えたいという思いの共有のもと、多様な考えにふれ合う中で保育を更新したり、交流するよさを実感したりする関係性を「つながる」とし、研究テーマを「つながる保育」と設定した。本園が他園や他校種とつながることで、本園の保育の質のさらなる向上と、幼児教育・保育の質への理解を共に深めることを目指し、地域における国公立の園の果たす役割について検討していく。

### 3 研究計画と研究の内容

#### 第1年次（令和5年度）

- ・幼稚園・保育園・認定こども園と本園がつながることを試みながら、本園の保育を問い直す。
- ・幼稚園・保育園・認定こども園と本園がつながるための、仕組みやプロセスを探る。

#### 第2年次以降（令和6年度以降）

- ・1年次での研究成果を基に、幼稚園・保育園・認定こども園がつながるための仕組みやプロセスを整える。
- ・幼稚園・保育園・認定こども園に加え、他校種とつながることを試みる。
- ・つなぐ役割を担う国公立の園の在り方を検討する。

### 4 第1年次研究副題 ～園と園のつながりをつくる～ について

これまで本園では幼児教育研究会を開催することにより、本園の幼児の姿を基に語り合い、保育に対する見方・考え方を交流してきた。一方で、秋田（2023）が指摘するように、本園の幼児だけでなく、他園の幼児の姿についても語り合うような双方向の交流や、長期的な幼児の育ちや保育に対する見方・考え方の変容を継続的に語り合う交流が、本園の保育の質の向上とその質にかかわる理解を共に共有するきっかけとなると考える。そのような継続的で双方向的なつながりをつくるためには、どのようなプロセスや仕組みがあるとよいか、模索していく必要がある。

そのために第1年次の研究副題を「～園と園のつながりをつくる～」とし、幼稚園・保育園・認定こども園の職員とつながることを試みる。本園がこれまでに追求してきた「遊び込む子ども」の姿、「子どもを支える保育—評価を通して—」において構築してきた評価のサイクルを基盤としながら、交流を通して保育を更新したり、園と園がつながることのよさを実感したりすることができるような関係性をいかに構築していくかを探っていく。

### 5 研究方法（第1年次）

#### （1）多様な交流の実施

他園が実施する園内研修への参加、語り合いの場の実施、研修のコーディネート、共同で保育を行う場の設定、カンファレンスの公開など、他園と調整を図りながら多様な交流の場を設定する。幼稚園・保育園・認定こども園と本園とのつながりをどのようにするのか、交流の事例を蓄積することを通して、そのプロセスを探る手立てとする。

#### （2）保育に対する見方・考え方の言語化

交流によって保育に対する見方・考え方をどのように更新したのか、振り返りやカンファレンスなどを実施することにより言語化していく。書くことや語るることにより、保育に対する見方・考え方の変容を自覚するとともに、どのように交流することが園と園のつながりをつくるのかを探る手掛かりとしたい。

#### （3）情報を共有する方法の実施と振り返り

本園の保育の評価の取組の一つである「のびのび保育シート」を活用する、交流後の実感を綴ったレポート（「交流だより」）を書いてフィードバックする、HPやチラシを通して園と園がつながるよさを実感したことを発信するなど、幼稚園・保育園・認定こども園と双方向に、継続的に交流するための仕組みをつくる。実施後には、その方法が適切であったか振り返りながら、情報を共有する仕組みを更新していく。

#### (4) 大学や研究協力園との連携

本学教員からの指導・助言を受けながら研究を進めていく。また、本学の大学生、大学院生に、交流にかかわる発話記録とその分析を依頼する。交流によって保育をどのように更新したのか、より客観的な視点から読み取る一助としたい。

交流を終えた後には、その交流にどのような価値があったかについて、研究協力園から評価してもらうことを依頼する。園と園の「つながり」を広い文脈で考える手立てとしたい。

### 6 研究の実際

今年度、実際に行った交流の日程は、(表1)のとおりである。

(表1) 実際に行った交流の日程

4月	25日 B園参観 26日 A園参観・振り返り 27日 C園参観	7月	12日 C園と一緒に保育・振り返り 18日 A園参観・振り返り 19日 公開カンファレンス(11名) 27日 B園参観
5月	10日 公開カンファレンス(1名) 17日 公開カンファレンス(1名) 23日 研究保育・交流の打ち合わせ	8月	1日 B園職員と合同研修 9日 公開カンファレンス(9名) 29日 公開カンファレンス(10名)
6月	9日 E園参観・振り返り(5名) 12日 A園参観・振り返り 15日 E園参観 19日 B園参観 26日 A園参観・振り返り 28日 公開カンファレンス(12名) 29日 B園参観 30日 D園参観	9月	6日 公開カンファレンス(4名) 13日 研究保育・交流の打ち合わせ

今年度の研究協力園であるA園、B園、C園とは、(図1)のように交流してきた。4月から9月までに、交流だより、公開カンファレンス、合同で保育をする、合同で研修をするなど、園ごとに、交流のかたちを模索し、それぞれに異なった交流を実施してきた。これらの交流において、探ってきた仕組みやプロセス、それらによりどのように保育を問い直してきたのかを、以下(1)～(4)に示していく。



図1 研究協力園との交流

#### (1) 「交流だより」における仕組みやプロセス・保育の問い直し

交流だより(図2)は、9月までに研究協力園に2回ずつ送付した。内容は、「交流を通して感じたこと」、「交流を通して保育を問い直し、実践したこと」、「大学の先生からのコメント」の3点である。4月の段階では、週の記録である「のびのび保育シート」を送付して情報を共有していたが、交流によって保育の捉え直しをしたことがよく伝わるよう、「交流だより」という形式に整えた。送付した園からは、読んだ感想を書いたり話したりして伝えてもらい、次の交流を考えていく手立てとした。

6月、4歳クラス担任は、A園に、「交流だより その1」(別添資料参照)を送付した。そこには、「A園を参観して、異年齢のかかわりについて考えたこと」、「自園での色水遊びにおいて異年齢のかかわりを支えた保育実践」、「保育実践にかかわる大学の先生からのコメント」を記載

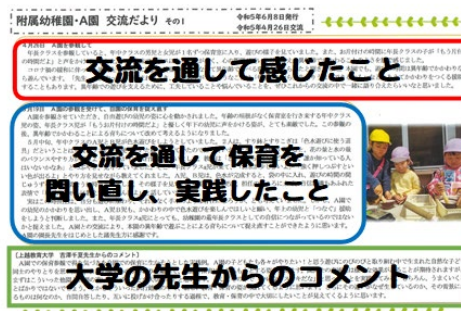


図2 交流だより



して送付した。A園の職員からは、この「交流だより その1」についての感想を、直接会って聞くことができた。

A園の職員は、「まずは幼児が自分のしたいことを存分に楽しむことが大切。かかわりは、幼児が存分に楽しむ中で自然と生まれてくるのではないかと」と、交流だよりを読んで感じたことを4歳クラス担任に伝えた。これを聞いた4歳クラスの担任は、「あえて異年齢のかかわりをつくるようにつないだことは、本当によかったのだろうか」「そのとき、幼児は、ほんとうにかかわりたいと思っていたのだろうか」という問いをもった。

このやりとりを通して、4歳クラス担任は、幼児の主体的なかかわりを支えるには、教師があえて「つなぐ」のではなく、幼児が自分でかかわりたいと思った時に、自分のタイミングでかかわっていけるよう環境構成を考えていこうとさらに捉え直し、それを「交流だより その2」に記載した。

その後、4歳クラス担任は、主体的なかかわりを支えるための環境構成として、以下の3つの保育実践を行った。

#### 【主体的なかかわりを支える環境構成Ⅰ】

6月中旬、クッキーづくりをしていたL児は、みんなに食べてほしいという思いをもった。4歳クラス担任は、もし、別の場所で料理をしている幼児とつくった料理を見合う少しのきっかけがあれば、主体的なかかわりが生まれ、遊びが広がるのではないかと考えた。そこで、内履きで歩くところの赤いマットを撤去し、料理を保存する棚の前に広い空間をつくる環境構成をした。

片付けの時間、L児のつくった料理を見たM児は、「これだれが作ったの?」と聞いた。それがきっかけとなって、L児とM児は、一緒にクッキーを食べたり、つくったりしながら、クッキー屋さんの遊びを楽しむ姿が見られた。4歳クラス担任は、L児がM児とのかかわりの中で、クッキーづくりの楽しみが広がり、お店屋さんを開くことへ遊びを広げたのではないかと捉えた。



#### 【主体的なかかわりを支える環境構成Ⅱ】

6月下旬、テラスでショーごっこをしていたN児は、ショーをお客さんに見てほしいという思いをもった。しかし、他の幼児も自分の好きな遊びをしているため、N児が呼びかけてもなかなかショーを見にこようとはしなかった。そこで、テラスにあったテーブルの向きを変え、園庭からも、テーブルに座った幼児からもショーが目線に入るように、環境構成をした。

その日、テーブルで料理遊びをしていたO児が、料理をしながらショーをしているN児たちに目線向け、「ここはね、ショーを見ながら料理が作れる場所なんだよ」とつぶやいた。それがきっかけとなり、N児は「いいこと考えた、じゃあここは、ショーを見ながらお料理が食べられるレストランってことにしたらどう?」と提案し、一緒にレストラン遊びをすることになった。N児はO児とのかかわりの中で遊びを広げたのではないかと捉えた。



#### 【主体的なかかわりを支える環境構成Ⅲ】

7月上旬、P児は、園舎裏で捕まえた虫を見てほしいという思いをもった。その思いを受けて、幼児が靴を履き替える動線上に、虫かご置き場をつくる環境構成をした。

片付けの時間に、虫かごの中のカエルが目に入ったQ児が「こっちで一緒に見ようよ」と言ったことがきっかけで、みんなで図鑑を見ながら、エサについて話し合う姿が見られた。P児はQ児とのかかわりの中で遊びを広げたのではないかと捉えた。



4歳クラス担任は、これら3つの保育実践に「大学の先生からのコメント」を添えて、「交流だより その2」にまとめた(別添資料参照)。大学の先生からは、「3つの実践は、同じものとして

みることができるでしょうか」「かかわることの意味やそれが子どもたちに与える影響について議論してみるとおもしろい」というコメントをもらった。このコメントを読んだ4歳クラス担任は、「かかわりとは一体何なのか」と、さらなる問いをもった。

そこで、8月の公開カンファレンスの機会に、A園の職員と「そもそも、かかわりとは何だろうか」ということについて語り合った。「遊びに夢中になっている中で自然に生まれてくるものではないか」「ただ同じ場にいることがかかわりではないと考える」「通りがかりに声をかけることだってかかわりである。思いを読み取ることがかかわりの根底にあるのではないか」「遊びの中で見られるかかわりをくらし全体で捉えたい」など、多様にかかわりについての意見が交わされた。語り合う中で、4歳クラス担任は、多様な見方・考え方に会ったことを自覚した。交流だよりでのやりとりを通して、保育を更新し、かかわりについて問い続けることの大切さに気付いた4歳クラス担任は、交流するよさを実感した。

この日の公開カンファレンスでは、A園の職員も、「普段何気なく行っていることを話題にしてもらうことで、自分の保育の捉え直しにつながっている」と実感を語った。本園だけでなく、相互に、普段やっていた「当たり前」を問い直し、これまであまり意識することがなかった自園の保育への自覚につながったのだと捉えた。

「交流だより」の仕組みやプロセスをつくってきたことによって、相互に多様な考えにふれ、交流するよさを実感する関係性ができているのではないかと捉えた。

## (2) 「公開カンファレンス」における仕組みやプロセス・保育の問い直し

公開カンファレンスとは、本園が評価の取組として実施している水曜カンファレンスに、外部から誰でも参加できるようにした語り合いの場のことである。年度当初に、(図3)のようなチラシで呼びかけを行った。公開カンファレンスは、前半、本園で行っている水曜カンファレンスを見てもらい、後半は、その話題も踏まえながら参加した方々と一緒に語り合う形式で行った。9月までの計7回、他園の先生をはじめ、園長先生、他大学の学生、保育専門学校の先生、小学校の先生など、市内外の50名を超える参加があり、(表2)様々な立場の方との交流をもつことができた。



図3 公開カンファレンス チラシ

(表2) 公開カンファレンス参加者

日付	参加者
5月10日(水)	本学院生1名
5月17日(水)	本学院生1名
6月9日(金)	長岡市幼稚園職員5名
6月28日(水)	津南町保育園職員2名・長岡市幼稚園職員3名・専門学校講師1名 本学院生6名(うち小学校籍現職院生3名)・他大学院生1名
7月19日(水)	市内専門学校学生5名、講師1名・本学院生3名・長岡市幼稚園職員2名 柏崎市幼稚園職員1名
8月9日(木)	長岡市幼稚園職員3名・専門学校講師1名・研究協力園職員2名 他大学院生1名
8月30日(水)	津南町保育園職員1名・上越市保育園園長6名
9月6日(水)	津南町保育園職員2名・上越市保育園園長1名・上越市保育園職員1名



8月9日の公開カンファレンス（図4）に参加したE園の職員からは、本園を参観したことが保育の捉え直しにつながった事例を聞くことができた。E園では、6月に本園の参観で心に残ったことを、プレゼンテーションにして職員に共有したそうだ。絵カードを取り入れ生活の見直しにつながったこと、支度が終わった子から遊べる環境にしたこと、靴の選択を幼児が自由にできるようにしたことなど、E園に合ったかたちで取り入れていったことで、保育がよりよい方向に更新されているという実感を聞くことができた。



図4 公開カンファレンスの様子

また、E園の職員とは次のようなやり取りがあった。

E園職員：「附属幼稚園で見た絵カードを、保育に取り入れてみました」  
 本園職員：「実は私たちも、B園の絵カードを見て取り入れたんです」  
 E園職員：「つながっていますね」

公開カンファレンスは、本園だけでなく、他園の保育の捉え直しや交流するよさの実感も支えているのではないかと捉えた。また、公開カンファレンスという場が、本園だけでなく、多様な園の情報を得られる場として機能していると実感した。本園でのカンファレンスに参加することで、本園が交流している園の情報も得ることができる、いわゆるハブのような役割（図5）になっていたのではないかと捉えた。



図5 「ハブ」のような役割をするイメージ

公開カンファレンスに参加したB園の職員は、4月からの一連の交流について振り返り、「単発ではなく、継続的にかかわれたのがよかった」「公立の園同士ではないつながりが、園に新たな風が入るきっかけになった」と語った。継続的に双方向に交流することが、「つながる」関係性を構築していく上で大切なことなのではないかと実感した。

### (3) 合同で研修をする仕組みやプロセス・保育の問い直し

5月、今後の交流をどうするかについて、話し合いの場を設定した。互いの園を参観し相談する中で、どんな交流が幼児や保育者にとって最善なのか、その実現の可能性を一緒に探っていった。B園とは、保育において大切なことを一緒に共有したいという思いから、合同で研究を行うことに決まった。園の状況や保育者の思いを擦り合わせていく中で、一緒に交流をつくっていった。

B園で行った合同研修では、一緒に捉えた幼児の姿を共有しながら、保育において大切にしたいことをKJ法的手法で意味づけていった（図6）。B園職員と本園職員2名（3歳クラス担任、4歳クラス担任）の計8名で語り合った。

3歳クラス担任は、B園でしていた洗濯の遊びを見たとき、「これまで洗濯を遊びとして捉えていなかった自分に気付いた。教師の知識の範囲で遊びを捉えず、幼児が本当にしたいことは何かを読み取ることが大切」と語った。これをきっかけに「幼児をどう見るか」が研修の中で話題になり、一人一人の遊びをよく見ることで、好きな遊びに夢中になれる環境をつくっていくことが必要であると、保育において大切なことを共有した。また、「教師が先回りしすぎないことの大切さ」「異年齢でかかわることの育ち」についても、再確認した。

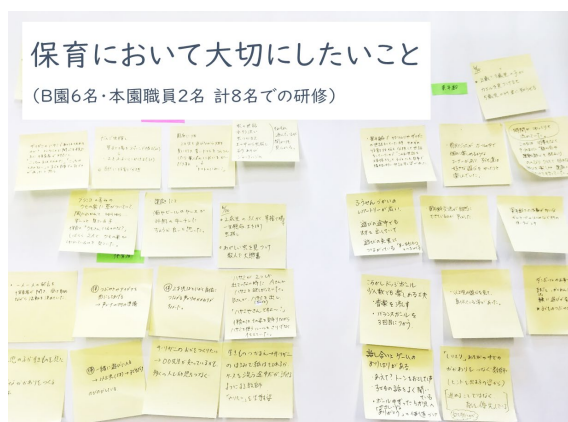


図6 B園との研修で共有したこと

3歳クラス担任は、研修を終えた後、「保育において大切にしたいことが同じ方向性であり、『つ



ながる』感じがした」と、その実感を語った。

#### (4) 合同で保育をする仕組みやプロセス・保育の問い直し

5歳クラス担任は、C園の職員と交流について話し合う中で、「職員のつながりだけでなく、子ども同士のつながりの中で育ちにつなげたい」という思いを共有し、本園で一緒に保育を行うことに決めた。互いの思いや園の状況、日程を擦り合わせ、一緒に保育をする環境を整えていった。

7月13日、本園にC園の幼児25名と、職員4名が来園し、本園の幼児と一緒に遊ぶ機会を設定した(図7)。5歳クラス担任は、保育をする中で、次のような幼児の姿を捉えた。



図7 合同保育での幼児の様子

5歳クラスのR児と、C園の5歳クラスS児が、園舎裏に一緒に虫捕まえに行こうとする様子を見て、2人のかかわりを見守ることにした。2人がカマキリを見つけた時、C園S児は「虫網がないと採れないよ」とR児に話した。R児は、「手でも大丈夫、ほら、ここをもつんだよ」と話すと、S児は「ぼくもやってみる」と手でカマキリを捕まえようとしていた。

この姿を見ていた5歳クラス担任は、C園S児の遊びの広がりを捉え、C園の職員と共有した。一緒に保育をしたC園の職員は、「S児は、初めての環境の中で、周りの子と教え合う、周りの子の真似をしてみるなどの姿が見られ、とても良い経験となった」と語った。5歳クラス担任は、R児、S児の姿から、「子どもはやっぱり自分たちで育つ力をもった存在であり、その力を信じる教師であり続けたい」という実感をもち、子どもや園の実態は違えど、子どもの豊かな育ちを支えたいという思いは共有できたのではないかと捉えた。

## 7 研究の手応えと今後の展望

### (1) 多様な交流の実施

交流日より、公開カンファレンス、合同で保育をする、合同で研修する、など、多様な交流を実施してきた。どの交流においても、話し合い、一緒につくってきたことが、交流するよさの実感になっているのではないかと、つまり、共につくってきたプロセスが大切なのではないかと捉えている。今後、園の実態や幼児の実態を踏まえて話し合うことを大切に、「つながる」ための交流をさらに模索していきたいと考える。

### (2) 保育に対する見方や考え方の言語化

保育に対する見方や考え方を、語り合いや交流だよりにより言語化してきたことで、継続的に、双方向に、当たり前を問い直すこと、意識していなかった自園のよさを自覚すること、新たな見方や考え方に出会うことにつながった。

### (3) 情報を共有する方法の実施と振り返り

情報を共有する方法の実施と振り返りを交流日より、チラシ、交流について話し合う場の設定などによって行ってきた。

交流だよりのやりとりをした園からは「お便りを全職員で共有することで、全職員の保育の見直しにつながった」という、実感を聞くことができた。直接会っていないくても、多くの方と保育実践やその実感、本学教員の意味付けを共有できる方法であったことに、手応えを感じている。一方で、この交流だよりを交流した園とのやりとりだけにとどめず、広く発信していくことが、今後の園と園のつながりをつくる手段になると考える。

交流について話し合う場の設定については、一緒につくる交流を支えていく方法として機能した。今後、開催時期を工夫したり、オンラインでの環境を整えたりすることで、交流の輪を広げたいと考える

#### （４）大学や研究協力園との連携

大学との連携により、交流だよりにコメントをもらったことで、新たな見方との出会いにつながり、実践と理論を行き来しながら学ぶ実感を得た。本園だけではなく、研究協力園からも「大学の先生からの意味付けが聞ける機会は貴重であり、今後もお願いしたい」という実感を聞くことができた。

研究協力園との連携が、今後、新たな交流が生まれるきっかけになってほしいという願いを持っている。今年度の交流をモデルケースのようにして、そのよさを広めていくことにより、さらなる「つながり」が生まれるきっかけをつくっていきたいと考える。

今年度、交流を通して、あえて違った文化的な背景や価値観にふれてきた。本園の職員は、これまでの交流を通して「いろいろな園の考え方を知ることができてよかった。それが自分たちの保育の見直しにつながっている」「他園からの学びを保育に取り入れたことが、子どもたちの育ちにつながっている」「『子どもをどう見るか』『どんな考えで保育をするか』という子ども観や保育観が同じ方向を向いてきたのではないかと実感している。保育を更新したり、交流するよさを実感したりする関係性を、一緒につくってきたプロセスが大切であったと捉えている。

今後の展望として、このような「つながる」保育の価値を広く伝えられる園を目指していきたいと考える。今後、さらに他園と「つながる」こと、そして、小学校と「つながる」ことを試みたい。また、つながりの中で、附属幼稚園の保育や子どもの姿を通じて、他園同士、他校種との橋渡しをする役割が担えるのではないかと考える。そのような国公立の園としての在り方についても検討していく。

#### 【引用文献】

- 文部科学省 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（中教審第228号）2021年
- 文部科学省 幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会における審議経過報告 2022年
- 秋田喜代美 「これからの国公立幼稚園・こども園に期待すること」幼児教育じほう（第51巻）P35  
2023年

前研究「子どもを支える保育」では、保育記録・カンファレンス・のびのび保育シート・期の振り返りの「4つの取組」を通して、保育の質の向上につながったという手応えを得た。今後、さらなる保育の質の向上を目指していくために、保育観を共有している職員との語り合いや保育の評価にとどまらず、違う文化的な背景や価値観にふれることで、保育に対する見方・考え方を更新していくことが必要であると捉えた。

そこで、子どもの豊かな育ちを支えたいという思いの共有のもと、多様な考えにふれ合う中で保育を更新したり、交流するよさを実感したりする関係性を「つながり」と定義し、新たな研究テーマを「つながる保育」と設定した。本園がこれまでに追求してきた「遊び込む子ども」の姿、「子どもを支える保育」において構築してきた評価のサイクルを基盤としながら、本園が他園や他校種とつながることで、本園の保育の質のさらなる向上と、幼児教育・保育の質への理解を共に深めることを目指し、地域における附属園の果たす役割について検討していくこととした。

第1年次である今年度は、研究副題を「園と園のつながりをつくる」とし、幼稚園・保育園・認定こども園と本園がつながることを試みながら、本園の保育を問い直すこと、これらの園とつながるための仕組みやプロセスを探ることを、研究の内容とした。

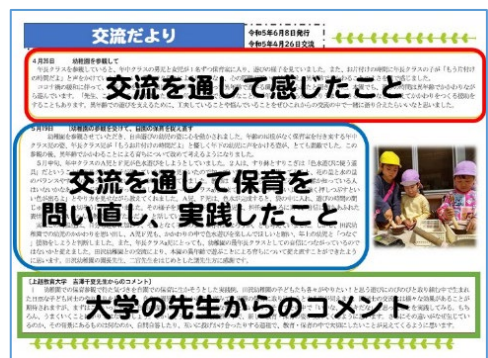
以下、取組の過程と、見えてきた成果について示す。

### 園と園のつながり① 交流だより

まず、交流を始めるにあたり、今年度の交流をどのように進めていくかを話し合った。本園で開催している幼児教育研究会のように、他園の先生方が本園を参観するというかたちにとどまらず、本園の職員が他園へ足を運び、他園の文化を肌で感じることによって、本園の保育を捉え直していくことを大切にしようと話し合った。また、交流を終えた後には、その交流での実感を園内で共有し、園の保育の方向性を全職員で更新していこうと共有した。

そのために、交流をした後、交流を通して感じたことや、それがどのように保育の更新につながったのかを共有することが必要であると考えた。4月の段階では、週の記録である「のびのび保育シート」を送付して情報を共有していた。しかし、参観したことから何を感じ、それがどう保育の捉え直しにつながったのか、また、それらプロセスにはどのような意味や価値があったのかということがさらによく伝わるようにしたいという思いから、「のびのび保育シート」とは別に、形式を整えていこうと考えた。

そうして出来上がったのが「交流だより」(右図)である。「交流を通して感じたこと」、「交流を通して保育を問い直し、実践したこと」、「大学の先生からのコメント」の3つの視点で構成し、交流した園に送付した。読んだ感想を本園に伝えてもらい、次の交流を考えていく手立てとしていった。交流だよりによる交流が保育の捉え直しにつながった事例の概略を以下に示す。



4歳クラス担任はA園を参観し、幼児の主体的なかかわりを支えるには、教師が幼児同士のかかわりを促すのではなく、幼児が自分でかかわりたいと思った時に、自分のタイミングでかかわっていけるような環境をつくるのが大切だと実感した。そこで、保育室前テラスの環境を大きく更新し、幼児のかかわりを支える実践を行った。実践後、大学の先生からコメントをもらい、「交流だより」として整理してA園に送付した。

A園の職員と交流だよりを読んだ感想をやりとりする中で、4歳クラス担任は「そもそもかかわりとは何なのか」という、さらなる問いをもった。そこで、かかわることの意味や、かかわりが幼児に与える影響についてカンファレンスで語り合う機会を設定した。「遊びに夢中になっている中で自然に生まれてくるもの」「ただ同じ遊びをしていることがかかわりではない」「通りがかりに声をかけることもかかわりである」「思いを読み取ることがかかわりを支える根底にある」「遊びの中で見られるかかわりをくらし全体で捉えたい」など、多様な意見が交わされ、かかわりについての見方や考え方を更新することにつながった。

A園の職員からは「お便りを全職員で共有することで、園全体の保育の捉え直しにつながった」という実感を聞くことができた。直接会っていないけれども、多くの方と保育実践やその実感、大学の先生の意味付けを共有できたことに手応えを感じている。

一方で、この交流だよりを研究協力園や、本園とのつながりのある園とのやりとりだけにとどめず、広く発信していくことが、今後の新たなつながりをつくる手だてになるのではないかと考えた。

## 園と園のつながり② 公開カンファレンス

本園は、いつでも、誰でも参観を受け入れていくスタンスである。しかし、昨年度の参観者は決して多いとはいえなかった。その要因の1つとして考えられるのが、「本園が敷居の高い場所に感じる」ということではないかと捉えた。また、外遊びの環境が整っているということは本園の特色であるが、裏を返せば、他園にとっては、参考になりにくい、保育に取り入れにくい、と思われるのではないかと捉えた。

まずは、交流をしてみることができれば、「質の高い保育を目指したい」「子どもが主体の保育をしたい」という思いが共通しているということを確認し合えるのではないかと考えた。そこで、「子ども主体の保育を一緒に考えていきませんか」というキャッチフレーズのもと、「公開カンファレンス」というかたちで交流ができるように、チラシを発行することにした。そのチラシを通して、違う文化をもった園から、学びたいという思いが伝わるようにしたいと考えた。公開カンファレンスとは、本園が週に1回全職員で実施しているカンファレンスに、外部から誰でも参加できるようにした語り合いの場のことである。



他園の先生方には、評価の文脈として行っているカンファレンスをまずは見てもらいたいと考えた。何をどのように語り合うことが子ども主体の保育につながるのかを、考えるきっかけになるとよいという願いがあったからである。そこで、公開カンファレンスの前半は、本園で行っている水曜カンファレンスを見てもらい、後半は、その話題も踏まえながら参加した方々と一緒に語り合う形式で行った。

2月までの計13回、他園の保育士をはじめ、園長、他大学や専門学校の学生と教員、小学校の職員な



ど、市内外から計100名を超える参加があり、様々な立場の方と語り合うことができた。

8月の公開カンファレンスに参加したD園の職員からは、本園を参観したことが保育の捉え直しにつながった事例を聞くことができた。本園だけでなく、他園の保育の捉え直しや交流するよさの実感にも結びついているのではないかと考えた。また、公開カンファレンスという場が、本園だけでなく、多様な園の情報を得られる場として機能していると実感した。参加者は、本園でのカンファレンスに参加することで、本園が交流している園の情報も得ることができ、本園がいわゆる「ハブ」のような役割を担うことができたのではないかと捉えた。

B園の職員は、「公立の園同士ではないつながりが、園に新たな風が入るきっかけになった」と語りました。附属園としての本園の在り方について考える示唆が得られた。

### **園と園のつながり③④ 合同研修・合同保育**

他園を参観した後の「交流だより」、本園で実施する「公開カンファレンス」以外にも、子ども主体の保育において大切にしたいことが共有できるような交流のかたちがあるのではないかと考えた。そこで、5月、今後の交流をどのようにしていくかについて、研究協力園と話し合いの場をもつことにした。互いの園を参観し相談する中で、今後どんな交流が幼児や保育者にとってよりよいものになるか、その実現の可能性を一緒に探っていった。

B園とは、「保育において大切なことを一緒に共有したい」という思いを共有し、合同で研修を行うことにした。合同研修では、教師の知識の範囲で遊びを捉えず、幼児が本当にしたいことは何かを読み取ることが大切であることが共有された。研修に参加した本園の3歳クラス担任は、「一緒に研修し、みんなで語り合うことで、保育で大切にしていることが同じ方向性であり、つながる感じがした」と、その実感を語った。

C園とは、「職員のつながりだけでなく、子ども同士のつながりの中で育ちを支えたい」という思いから、合同で保育をすることになった。7月と10月に、本園にC園の5歳クラスの幼児25名と、職員3名が来園し、本園の幼児と一緒に遊ぶ機会を設定した。本園の5歳クラスの担任は、合同保育で捉えた幼児の姿から、「普段生活する環境は違っても、子どもはやはり自分で育つ力をもった存在である」という実感をもった。園の文化的な背景は違っても、子どもの豊かな育ちを支えたいという思いが繋がっているのではないかと捉えた。

このように、園と園とのつながりは、園の状況や保育者の思いを擦り合わせていく中で、園同士で一緒につくっていくことで深まっていくものであると考えた。

## 今年度の研究の手応えと今後の展望

園と園のつながりは互いの保育観への共感によって生まれ、他園との交流により保育観が更新されていく手応えを得た。交流を双方向に行うことで、新たな見方や考え方に出会い、これまで当たり前だと思っていたことを問い直すこと、意識していなかった自園のよさを自覚することにつながった。互いの園の思いを擦り合わせていく過程においては、新たに「交流だより」「公開カンファレンス」「合同研修」「合同保育」の4つの交流のかたち生まれ、園と園のつながりをつくるためのしくみが見えてきた。また、本園での交流が他園の情報を得られる場として機能している実感もあり、本園がいわゆる保育の「ハブ」のような役割を担えるのではないかという手応えがあった。

今後の展望として、2つのことが見えてきた。1つは、継続的なつながりをつくっていくことである。異なる文化や価値観をもった園と園の「つながり(子どもの豊かな育ちを支えたいという思いを共有し、交流するよさを実感し合ったり、互いの保育を捉え直したりする関係性)」は簡単にできるものではないからである。互いの文化への共感が生まれるためには、語り合い、新たな見方や考え方をもって目の前の幼児の姿を捉えていくことを絶えず行っていくことによって、より深い「つながり」をつくり、これまでよりも質の高い保育の捉え直しをしていきたいと考える。また、交流の時間の確保や交流を行う職員のリソース不足、交流をしている職員の異動などがあっても、園と園との「つながり」が続いていくためのしくみを整えていく必要性も感じている。

2つは、他園の状況やニーズに応じた交流のかたちをさらに模索していくことである。「交流だより」「公開カンファレンス」「合同研修」「合同保育」の交流のかたちは、どのように交流するよさの実感や保育観の更新につながっているのかについて、さらなる検討の必要性を感じているからである。新たな交流のかたちが「つながり」を広げる可能性もある。今年度実施した4つの交流のかたちを再検討したり、新たな交流のかたちを見い出したりしながら、園と園の「つながり」をつくるしくみを整えていきたいと考える。これらの仕組みを整える過程において、本園と他園の「つながり」だけでなく、他園と他園の「つながり」をつくる、「ハブ」のような役割を担える本園の在り方についてもさらに検討していきたい。

## 令和5年度 「つながる保育（第1年次）～園と園のつながりをつくる～」 研修ヒストリー

ここでは、研修会議やカンファレンスでどのようなことが検討され、いろいろな園とどのように交流し、つながりがつくられていったのか、その経緯について示す。「詳細」の項目に、検討してきた内容については○、交流のしくみがつくられたヒストリーについては・で示していく。

日、場面、参加者	内容	詳細（○検討のプロセス、・つながりがつくられたプロセス）
4月5日 研修 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員	今年度の研究テーマと方向性についての検討	○今年度は新たに研究を立ち上げる。 ○本園といろいろな園がつながることで、本園の保育の質のさらなる向上と、幼児教育・保育の質への理解を共に深めることを目指していく。 ○研究の方法として、全職員がいろいろな園と交流し、交流を通して、自らの保育を見直す機会にすることを確認した。
4月12日 研修 各クラス担任、養護教諭	今年度の研究の見通しについての検討	○研究協力園と密に交流すること、いろいろな園と広く交流することを軸とし、今年度は少しずつつながりをつくっていく1年とすることを共有した。 ○相手のニーズに合った交流を進めて、様々な園の大切にしていることを知っていくことが大切だということを確認した。
4月14日 研修 各クラス担任、養護教諭、研究協力者	研究推進の概要についての検討	○「つながり」とはどのような状態のことを指すのか、「交流」とはどのようなことを想定しているのかを明確にしていく必要があることを確認した。 ○交流した後、交流での気づきや学びを職員で共有する場を水曜カンファレンスの中で取り入れることを確認した。 ○学生が研究の中でどのような役割を果たすことができるかを検討した。
4月19日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究の詳細についての検討	○「つながり」の定義について検討した。 ○交流で他園を参観する際の参観の視点を確認した。
4月25日 交流（参観） 3歳クラス担任	A園参観	・3歳クラス担任がA園（主に3歳クラス）を参観した。 ・1日の流れを絵カードで示し、幼児が生活に見通しをもてるようにすることで、幼児の安心や安定につながっていると捉えた。
4月26日 交流（参観） 4歳クラス担任	B園参観・語り合い	・4歳クラス担任がB園（主に5歳クラス）を参観し、その後語り合いを行った。 ・語り合いでは、異年齢でかかわることのよさについて意見交流が行われた。
4月26日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員	最近の保育についての語り合い	・新年度になり、各クラスとも安心感を大切に、それぞれの幼児の様子をよく見て、読み取りながら幼児理解を深めているところだということを確認した。 ・クラスの枠組みはあるものの、園全体で全員の幼児をみていくという方向性を確認した。
4月27日 交流（参観） 5歳クラス担任	C園参観	・5歳クラス担任がC園（主に5歳クラス）を参観した。 ・5歳クラスの活動を参観し、年長クラスになった喜びや年長ならではの活動の意味を考えた。

5月1日 研修 各クラス担任、養護教諭	交流を終えての情報共有と今後の見通しの確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>○交流の際の気づきや学びを共有した。</li> <li>○交流の気づきをどのように交流園にフィードバックしていくのか、またそれらを他園にどのように発信していくかを検討した。</li> <li>○のびのび保育シートに交流しての気づきや学びを記載し、それを交流園に送る。その気づきを自分の保育に取り入れるという実践を積み重ねていくことを確認した。</li> </ul>
5月10日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員	交流での気づきの共有	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵カードを使って1日の流れを示すことで、幼児が安心して園生活を送ることができるのではないかとということが共有され、各クラスでの取組を互いに紹介し合った。</li> <li>・砂場の環境構成で、春のこの時期だからこそ、幼児が安心して遊べるようにおもちゃの種類を増やしてもいいのではないかと提案があり、全員でしまっておもちゃを見て、環境構成を更新した。</li> <li>・年長クラスとしての自信につながるような援助について話題になった。遊びの中で、異年齢でかかわること、保育者が幼児を信じて待つ姿勢が自信につながっていくのではないかと共有した。</li> </ul>
5月10日 研修 各クラス担任、養護教諭、研究協力者	研究推進の概要の検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「つながり」の定義について検討した。「子どもの豊かな育ちを支えたいという思いの共有のもと、多様な考えにふれ合う中で保育を更新したり、交流するよさを実感したりする関係性」を「つながり」とすることにした。</li> <li>○今後の交流の回数や内容について、具体的に検討した。</li> </ul>
5月17日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員	最近の保育についての語り合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回のカンファレンス後に更新した砂場の環境について、その後の幼児の様子を共有した。4歳クラス児が新しい道具（熊手）に興味を示し、砂場を深く掘り進めている様子があった。それを近くで3歳クラス児も見ている、年上の幼児の遊びの雰囲気を感じていたのではないかと振り返った。</li> <li>・絵カードの活用に関して、各クラスでの取組や更新した点について、情報共有した。</li> </ul>
5月25日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究保育を終えての情報共有と今後の見通しの確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>○研究保育の際に研究協力者とどのような協議の内容だったのかを共有した。また、今後の交流の見通しを確認した。</li> <li>○交流しての気づきや学びをのびのび保育シートを使って研究協力園と共有し、「交流だより」という形で発信していくことを確認した。</li> </ul>
6月6日 研修 各クラス担任	研究の見通しの確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「交流だより」の書式、発信の仕方を検討した。</li> <li>○研究会の案内はがきや園紹介のパンフレットの検討日程を確認した。</li> </ul>
6月8日 交流だより①発行 3歳クラス担任	交流だより①の発行	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3歳クラス担任が4月25日にA園を参観した際の気づきや、その気づきから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより①」にまとめ、A園に送付した。</li> </ul>
6月8日 交流だより①発行 4歳クラス担任	交流だより①の発行	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4歳クラス担任が4月26日にB園を参観した際の気づきや、その気づきから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより①」にまとめ、B園に送付した。</li> </ul>



6月8日 交流だより①発行 5歳クラス担任	交流だより ①の発行	<ul style="list-style-type: none"> <li>5歳クラス担任が4月27日にC園を参観した際の気付きや、その気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより①」にまとめ、C園に送付した。</li> </ul>
6月9日 交流 D園職員5名来園	保育参観、 語り合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>本園の保育の様子を参観していただき、教師が共感的に幼児の姿を捉え、幼児自身が決めたり、選んだりすることを大切にしていることに共感を得た。</li> <li>片付けの場面で、教師が幼児の育ちや学びの姿を想定し、声かけをしていることに新たな気付きがあったと語っていた。</li> </ul>
6月12日 交流（参観） 4歳クラス担任	E園参観	<ul style="list-style-type: none"> <li>4歳クラス担任が、E園を参観した。</li> <li>異年齢でかかわることについての意義やどのような場づくりが異年齢でのかかわりにつながるのかについての気付きがあり、その気付きを「のびのび保育シート」にまとめ、送付した。</li> </ul>
6月15日 交流（参観） 4歳クラス担任	B園参観・ 語り合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>4歳クラス担任が、B園（主に5歳クラス）を参観し、その後語り合いを行った。</li> <li>「交流だより①」に記載のあった幼児同士のかかわりについて話題になり、幼児のかかわりをどう支えるかについて協議した。</li> </ul>
6月19日 交流（参観） 5歳クラス担任	C園参観・ 語り合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>5歳クラス担任がC園（運動会前の保育）を参観し、その後語り合いを行った。</li> <li>語り合いでは、年少クラスでは年少クラス児が扱いやすい道具を使い、年上の幼児はその発達段階に合ったさらに魅力的な道具を使うことにより、年上の幼児への憧れにつながっていることが話題になった。</li> </ul>
6月21日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、 養護教諭、教育補佐員	交流での気 付きの共有	<ul style="list-style-type: none"> <li>4歳クラス担任がB園を参観しての気付きを共有した。</li> <li>B園では、幼児が生活しやすいように環境構成を工夫していることが話題になった。脱いだ靴や靴下の扱いや汚れた服の着替えについて、援助の方向性を確認した。</li> </ul>
6月26日 交流（参観） 5歳クラス担任	B園参観	<ul style="list-style-type: none"> <li>5歳クラス担任がB園（主に5歳クラス）を参観し、その後語り合いを行った。</li> <li>語り合いでは、職員が保育をしながら幼児の情報を共有し、幼児同士のかかわりを全職員で支えていることが話題になった。</li> </ul>
6月28日 交流 （公開カンファレンス） 各クラス担任・副担任、 養護教諭、教育補佐員、 他園職員5名、 大学院生2名	その日の保 育について の語り合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>「異年齢での道具の貸し借りをどのように援助するとよかったのか」「『貸して』には、『いいよ』と必ず答えた方がよいのか」について話題になった。</li> <li>話題になったことについて、小グループでさらに語り合った。</li> </ul>
6月29日 交流（参観） 3歳クラス担任	A園参観・ 語り合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>3歳クラス担任がB園（主に3歳クラス）を参観し、その後語り合いを行った。</li> <li>語り合いでは、幼児の姿から環境を更新することで、幼児が自分で好きな遊びをしてほしいという保育者の願いについて話題になった。</li> </ul>

6月30日 交流（参観） 3歳クラス担任	E園参観	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3歳クラス担任が、E園を参観した。</li> <li>・遊戯室において異年齢で遊ぶ場面では、発達段階に合わせた遊具と多様に遊ぶことができる風船の提示等の環境構成の工夫が、夢中になって遊ぶ姿につながっていると捉えた。</li> </ul>
7月5日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、研究協力者	交流での気付きの共有	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育の中に音楽を取り入れることの気付きを共有した。生活の流れの中に、音楽の要素を取り入れることで、それが幼児の楽しみにつながっていったことや遊びの時間に音楽を流していることで、その遊びが盛り上がるということがあったということが語られた。</li> <li>・洗濯を遊びとして捉えることで、幼児の楽しみを支えることができるのではないかと共有した。</li> </ul>
7月12日 交流（合同で保育） 5歳クラス担任	本園で合同で保育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・C園5歳クラス児25名、保育者3名が本園に来園。</li> <li>・C園保育者と合同で保育をする。</li> </ul>
7月12日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、C園保育者	幼児同士の交流についての語り合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・C園5歳クラス担任からは、本園で幼児が遊ぶ機会が実現できてよかった、環境構成を見直してみたいという話があった。</li> <li>・遊びの中での幼児同士のかかわりについて語られ、このあともさらに幼児同士の交流を深めていきたいという思いになったことが共有された。</li> </ul>
7月19日 交流 （公開カンファレンス） 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、他園保育者3名、学生9名	その日の保育についての語り合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「1学期を長期的な視点で振り返ると、どのような育ちが見られたか」について話題になった。</li> <li>・話題になったことについて、小グループでさらに語り合った。</li> </ul>
7月19日 研修 各クラス担任、養護教諭、研究協力者	研究の進捗状況の確認と今後の取組の検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>○各協力園との交流について、これまでの交流の内容と気付きなどについて確認した。</li> <li>○交流したことをどのようにまとめ、発信していくかについて検討した。</li> </ul>
8月1日 交流（合同で研修） 3歳クラス担任、4歳クラス担任	A園での研修に参加	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3歳クラス担任と4歳クラス担任がA園で行われた研修に参加した。</li> <li>・「保育において大切にしたいこと」について、意見交流を行った。</li> </ul>
8月1日 研修 各クラス担任、養護教諭	今後の研究の方向性の確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>○交流から見えてきたこと、自分の保育の捉え直しや交流した園の捉えの変容などを成果として、まとめていくことを確認した。</li> <li>○公開カンファレンスでの話題について共有した。</li> </ul>
8月3日 交流だより②発行 4歳クラス担任	交流だより②の発行	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4歳クラス担任が6月12日にB園を参観した際の気付きや、その気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより②」にまとめ、B園に送付した。</li> </ul>
8月3日 交流だより②発行 5歳クラス担任	交流だより②の発行	<ul style="list-style-type: none"> <li>・5歳クラス担任が6月19日にC園を参観した際の気付きや、その気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより②」にまとめ、C園に送付した。</li> </ul>

8月9日 交流 (公開カンファレンス) 各クラス担任・副担任、養護教諭、研究協力者2名、他園保育者3名、院生2名	これまでの交流についての意見交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体会では、これまでどのような交流をしてきたのかや交流後の気付きや感想、実践したことなどについて、情報共有した。</li> <li>・話題になったことについて、小グループでさらに語り合った。</li> </ul>
8月23日 交流だより②発行 3歳クラス担任	交流だより②の発行	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3歳クラス担任が6月29日にA園を参観した際の気付きや、その気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより②」にまとめ、A園に送付した。</li> </ul>
8月30日 交流 (公開カンファレンス) 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、他園保育者7名	その日の保育についての語り合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「年下の幼児の遊びを引っ張ってしまう幼児にどう言葉かけるか」について話題になった。</li> <li>・話題になったことについて、小グループでさらに語り合った。</li> </ul>
8月31日 研修 各クラス担任、養護教諭、研究協力者	研究会資料の検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>○研究会でのプレゼン資料について、これまで行ってきた研究をどのように提示するのかを検討した。</li> <li>○構造化し、聞き手に分かりやすい内容になるように検討していくことになった。</li> </ul>
9月6日 交流 (公開カンファレンス) 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、他園保育者2名	その日の保育についての語り合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「援助に迷ったとき、どのように判断するか」について、話題になった。</li> <li>・話題になったことについて、小グループでさらに語り合った。</li> </ul>
9月8日 研修 各クラス担任・養護教諭・研究協力者	研究資料の検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>○研究会でのプレゼン資料について検討した。</li> <li>○実践した中で考えたこと、感じたことなどを生の声とし表現していくことを確認した。</li> <li>○研究会における保育トークの持ち方について検討した。</li> </ul>
9月14日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究保育を終えての振り返りと今後の研究についての確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>○研究保育での保育トークや保育協議の中で、出された意見を共有した。</li> <li>○今後の交流の見通しを確認した。</li> </ul>
10月2日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究会の振り返りと今後の研究についての確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>○研究会で参会者から話があったことを共有した。</li> <li>○今後の交流の予定について、情報共有した。</li> </ul>
10月11日 交流 (公開カンファレンス) 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、他園保育者7名	その日の保育についての語り合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「主体性についてどのように考えるか」について話題になった。</li> <li>・話題になったことについて、小グループでさらに語り合った。</li> </ul>

10月12日 交流（合同で保育） 5歳クラス担任	本園で合同 で保育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・C園5歳クラス児25名、保育者2名が本園に来園。</li> <li>・C園保育者と合同で保育をし、その後語り合いを行った。</li> <li>・その日の保育を振り返る中で、幼児が自分で考えて遊ぶ姿が見られたことを共有した。</li> </ul>
10月25日 交流（参観） 4歳クラス担任	F園の参 観・語り合 い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4歳クラス担任が、F園を参観し、その後語り合いを行った。</li> <li>・一人の幼児の遊びを支えるF園の職員の連携についての気付きを「交流だより」にまとめ、後日送付した。</li> </ul>
10月31日 研修 各クラス担任、養護教諭	今年度の研 究のまとめ 方についての 検討	○今年度は研究のスタートの年であるため、研究の始まりや交流のしくみがどのようにできていったのか、そのプロセスを大切に示していくことが確認された。
11月1日 交流 （公開カンファレンス） 各クラス担任・副担 任、養護教諭、教育補 佐員、他園保育者4名	その日の保 育について の語り合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「子どもたちの優しさはどのように生まれるのか。その背景にあるものは何か」について話題になった。</li> <li>・話題になったことについて、小グループでさらに語り合った。</li> </ul>
11月15日 交流（合同で研修） 5歳クラス担任、4歳 クラス副担任	B園参観・ 研修	<ul style="list-style-type: none"> <li>・5歳クラス担任と4歳クラス副担任がB園を参観し、研修に参加した。</li> <li>・その日の保育を振り返りながら、「幼児が自分でやりたいことを見つけて遊ぶ力をつけるためには、どのように援助していくとよいのか」について協議した。</li> </ul>
11月15日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担 任、養護教諭、教育補 佐員	その日の保 育について の語り合い	・最近の幼児の様子について、事例をもとにしながら、情報共有し、援助の方向性について話し合った。
11月17日 交流（合同で研修） 4歳クラス担任	G園の参 観・研修	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4歳クラス担任がG園を参観し、研修に参加した。</li> <li>・幼児の読み取りを共有し、その日の遊びがどのような育ちにつながりそうかを語り合った。その後、語り合いでの気付きを「のびのび保育シート」で共有した。</li> </ul>
11月24日 交流（参観） 3歳クラス担任	A園の参 観・語り合 い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3歳クラス担任がA園（発表会前の保育）を参観し、その後語り合いを行った。</li> <li>・語り合いでは、4月から各クラスで楽しんできたことを発表に取り入れることや、発表会までの過程も含めて楽しむことが子どもたちの笑顔につながっていることが話題になった。</li> </ul>
11月29日 交流 （公開カンファレンス） 各クラス担任・副担 任、養護教諭、教育補 佐員、他園保育者7名	その日の保 育について の語り合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「遊びをどう広げていくか。保育室の限られたスペースをどのように活用するか」について話題になった。</li> <li>・話題になったことについて、小グループでさらに語り合った。</li> </ul>
12月1日 研修 各クラス担任・養護教諭	研究冊子作 成について の検討	○研究冊子作成に向けて、冊子のページ数や内容を検討した。12ページ構成で、来年度の研究につながるように紙面構成を行う。



12月7日 交流（参観） 4歳クラス担任	B園の参観・語り合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4歳クラス担任が、B園（主に5歳クラス）を参観し、その後語り合いを行った。</li> <li>・語り合いでは、幼児の遊びの充実の積み重ねについて、意見交流した。</li> </ul>
12月13日 交流 （公開カンファレンス） 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、他園保育者2名	その日の保育についての語り合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「室内遊びへの移行期をどのように支えていくかについて話題になった。</li> <li>・話題になったことについて、小グループでさらに語り合った。</li> </ul>
12月15日 交流だより③発行 4歳クラス担任	交流だより③の発行	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4歳クラス担任が12月7日にB園を参観した際の気付きや、その気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより③」にまとめ、B園に送付した。</li> </ul>
12月18日 交流（参観） 5歳クラス担任	C園の参観・語り合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・5歳クラス担任がC園（主に5歳クラス）を参観し、その後語り合いを行った。</li> <li>・語り合いでは、10月の交流（合同で保育）後の、C園幼児の遊びの広がりについて話題になった。</li> </ul>
12月18日 研修 各クラス担任・養護教諭・研究協力者	研究のまとめについての検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>○研究冊子の概要について検討した。</li> <li>○来年度の研究の方向性を確認し、その内容を研究冊子の中でもメッセージとして伝えられるとよいと確認した。</li> </ul>
12月18日 交流だより③発行 3歳クラス担任	交流だより③の発行	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3歳クラス担任が11月24日にA園を参観した際の気付きや、その気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより③」にまとめ、A園に送付した。</li> </ul>
12月21日 研修 各クラス担任・養護教諭	来年度の研究についての検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>○来年度の研究の方向性として、今年度の交流の継続をメインに考えることを確認した。</li> </ul>
1月11日 研修 各クラス担任・養護教諭	研究のまとめについての検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>○研究冊子の内容について、検討した。</li> <li>○交流の4つの取組について、それぞれのしくみができたプロセスが伝わるようにレイアウトしていくことを確認した。</li> </ul>
1月16日 研修 各クラス担任・養護教諭・研究協力者	研究のまとめの確認と来年度の研究の方向性についての検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>○研究冊子の中には、今年度の研究が1年目であることから、この1年間に行った交流等の内容が一目で分かるページがあるとよいことを確認した。</li> <li>○研究冊子に掲載する内容は、情報を精選し、具体的でわかりやすい内容にする必要があることを確認した。</li> <li>○来年度の研究の方向性としては、今年度のつながりを継続していきながら、新たなつながりを模索していくことを確認した。</li> </ul>
1月17日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員	研究の成果と課題についての振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度の研究について、成果や課題について振り返った。</li> <li>・交流によって感じたことや気付き、来年度に向けた課題などを出し合った。</li> </ul>
1月29日 交流だより③発行 5歳クラス担任	交流だより③の発行	<ul style="list-style-type: none"> <li>・5歳クラス担任が12月18日にC園を参観した際の気付きや、その気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより③」にまとめ、C園に送付した。</li> </ul>

<p>1月30日 研修 各クラス担任・養護教諭・研究協力者</p>	<p>研究冊子の検討と来年度の研究についての検討</p>	<p>○今年度の交流について、協力園とのやりとりだけでなく、いろいろな園との交流があったことが伝わるようにレイアウトしていくことを確認した。 ○今後、持続可能なつながりをどのようにつくっていくのが大切であること、今年度つながりができた園との継続を大切にしていこうと確認した。</p>
<p>2月7日 交流 (公開カンファレンス) 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、他園保育者10名</p>	<p>その日の保育についての語り合い</p>	<p>・「発表会へ向けた遊びの援助」「発表会のもちかた」について話題になった。 ・話題になったことについて、小グループでさらに語り合った。</p>
<p>2月14日～ 2月16日 交流(発表会公開) 他園保育者11名</p>	<p>お楽しみ発表会の公開・語り合い</p>	<p>・各クラスのお楽しみ発表会を公開した。 ・参観者からお楽しみ発表会を参観しての感想を聞いたり、質問を受けたりした。(2月14日)</p>
<p>3月4日 研修 各クラス担任・養護教諭</p>	<p>来年度の研究についての検討</p>	<p>○今年度の4つの取組を継続していくことを確認し、さらに新しい取り組みはどのようなことが考えられるかを検討した。</p>
<p>3月11日 研修 各クラス担任・養護教諭・研究協力者</p>	<p>来年度の研究についての検討</p>	<p>○今年度の研究を受けて、来年度は今年度の研究の「継続」と「広がり」を考えていくことを確認した。具体的にどのような方法が考えられるかについて、今後検討していくこととした。 ○「広がり」の面で、新しく取組を考えることも大切だが、これまでの取組の発展したかたちを模索することも大切にしていこうと確認した。</p>